

# まちづくり ひろしま

第35号 (平成30年5月15日)

読者数：599名 (募集中)

メール：[hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp](mailto:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp)

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

## □ 巻頭言

### 広島商工会議所ビル移転問題に寄せて ～欠かせない新視点、移転後の跡地をどうするか

広島諸事地域再生研究所代表 石丸紀興



#### はじめに

ついに新たな事態に突入した。広島商工会議所ビル移転問題が明確な形で浮上したのである。2018年2月23日付中国新聞によれば「紙屋町・八丁堀軸に検討／広島商工会議所ビル／都心活性化図る」という見出しで、商工会議所自身が新ビルの移転場所を中区の紙屋町・八丁堀地区を軸に検討していることを報じたのである。

以前からその必要性が叫ばれたりしたが、肝心の商工会議所自身が明確な姿勢を公表しなかったこともあって、停滞したままであった移転問題が、ようやく明快な形で都市政策や都市デザイン上の重要課題となったといえる。今後様々な形で議論や検討が進められるであろうが、ここで無視してはならない重要視点について提案しておこう。というのは、いままで広島ではともすれば抜け落ちていた重要な視点である。それは移転跡地をどうするかという問題である。広島ではともすれば軽視され、抜け落ちていた視点で、事実、広島大学の移転にしろ、広島空港の移転、さらには当初西部開発といわれ現在の商工センターの名の埋め立てに伴う各種施設の移転にしても、必ずしも貫ぬかれなかった視点、大きな欠陥があったといえよう。

#### 1. 移転問題は跡地問題と同時に取り組むべし

日本では、とりわけ広島では、何かの施設の移転の必要性が高まったとき、その移転先を巡って様々な議論と検討がなされるのであるが、その跡地問題については放置され、ほとんど移転が終了した段階でようやく移転跡地をどうするかということになる。詳細は省くがその典型的な事例が広島大学の統合移転で、移転が検討される中で、可部地区、五日市地区、西条地区が候補地となり様々な議論がされ、最終的に西条地区が決定され、移転決定から移転作業開始、さらには理学部や大学本部の移転が終了したが、東千田地区の本部跡地の利用は決定しなかったのである。現在においてもなお全体の利用方針は確定していない。

観音地区における広島空港の場合も、本郷地区、用倉地区といった候補地が検討され、結果的に本郷地区が選択され、1990年10月に新広島空港が開港して運用が始まったが、空港跡地は基本的には放置され、その後プロペラ機などの小規模旅客輸送用の空港として利用されたが、それも本格的なものでなく、しばらくして閉鎖され、部分的な利用はされてきたが、基本的には長い間未利用状態であった。

こういった事例を持ち出すまでもなく、移転問題が議論され始めると同時に、その跡地問題が検討されたという形跡はないであろう。同時でなくとも少し遅れ気味でも追っかけて検討が始まるということもなかったといえよう。完全に移転が終了した後になって、やっと検討が始まるという場合が多いのである。

本来、移転問題と跡地利用問題は同時検討すべき問題である。イギリスにおける戦後のニュータウン政策はよく知られているが、これはロンドン近郊にニュータウンを建設してロンドン人口の増大を防止しようということだけが目的であったわけではない。イギリスにおけるニ

ュータウンは日本と違い、住宅中心のベッドタウンではなく、最初から工場や事務所などの職場・事業所を重要な構成要素として建設しているのであるが、ニュータウンへ移転した跡地はその地区の再整備の対象となった。広島において当初は西部開発と呼ばれ、現在商工センターとなっている地区に多くの工場や店舗、事務所等が移転してきたが、その跡地が都市政策的に有効に利用されたのであろうか。ほとんどの場合、転売されたり、そのまま持続的に利用されたりして、再整備的な元地にはならなかったであろう。新開発と再開発とをセットにして都市戦略とする発想が最初から欠けていたと指摘せざるを得ない。移転問題とは移転の価値と合わせて、移転跡地の利用の価値も併せて評価すべきなのである。有効な土地面積がそれほど多くない広島にあってみれば、移転後何年も放置している土地を見れば、広島の都市政策はどうなっているのか、広島の都市政策の関係者は何を考えているのか、問われても仕方がないであろう。

## 2. そこで今回どうするか

いよいよ、商工会議所ビル移転問題であるが、移転理由は様々であろうが、一つは平和公園からの景観問題がある。外国人を案内していると慰霊碑のあたりで、商工会議所ビルを指さして、あれは何ですか問われること度々であった。その都度商工会議所ビルですよという、あの色はなぜかとか、あの高さは許されるのかとか、世界遺産の原爆ドームの存在もあって景観政策がどうなっているのかという議論になる。



とはいえ、本来所有権があり、かつ合法的に建設された建物であれば、一方的な要求を突きつけることは問題である。もし移転を迫るとすれば、その行先への都市政策的な配慮が必要である。そのためには、いくつか代替案を想定してその長所・短所、決定的問題点の有無、経費的な問題を出し合い、議論すべきである。完全に納得されなくとも、少なくとも、主要な問題を把握した上での決断でなければならない。



ここで、代替案の下敷きとしていくつか提案しておこう。

- A案 現在のビルを完全に取り払って中央公園の一部として合体させ、全体的な計画のもとに利用を進める
- B案 現在のビルを3階あるいは4階、あるいは5階とするような減築を実施し、壁面仕上げを含めてリニューアルして新たな利用を進める。その利用は平和公園との連携が必要となろう。
- C案 景観的に適応した形での新たなビルを計画して建設する。その利用は、B案と同じく階数は多くなく、平和公園との連携のものとする必要があるであろう。

以上はビルの形、あるいは有無といったレベルであるが、やはり同時にその利用の内容の議論も必要ということである。公園ということであれば別の議論となるが、建物ということになれば、様々な案が可能であろう。例えば、D案、E案として

D案 原爆資料館で展示しきれないテーマの展示、特に復興資料館のようなもの、UNITARやJICAなどの研修センター、広島地区の大学あるいは他大学を含めた平和教育センター、研修センター、出張講義センター等である。

E案 例えば、修学旅行生会館のような研修センター、宿泊場所等の建物の建設場所とする。

このD案、E案は、A案では成り立たず、B案、C案と連携しての案である。今後E案は良い案であれば、膨らんでもよいであろう。

いずれにしても商工会議所ビルの跡地から始まって、中央公園とはどうあるべきか、基町とは広島にとってどのような意味をもっているのか、特に原爆ドームと対峙し、平和公園と中央公園を結節する大事な場所は、そのランドデザインが問われることとなるであろう。

### 3. 景観問題の再検討、深化

いずれにしても、平和公園と連携してこの地区がどのような用途、景観であるべきという重要な課題に取り組むべきであり、それはもしかすると移転問題と同じくらい、いやそれ以上に重要な問題であり、早期に取り組むべき問題であろう。広島市景観審議会ではすでに「原爆ドームと原爆慰霊碑を結ぶ南北線」問題として検討を始めており、2018年3月29日付中国新聞によれば、「植栽で景観保護へ／広島市 背後の建物隠す」という一つの方針を示している。いくつかの案があるとき、それぞれの案の意味、効果、費用、実現方策等の検討を同時に進め、ある場合はさらに深く検討し、一定の案に収斂させていくことが望まれる。ここで市民的なレベルでの発言も歓迎されるであろうし、専門家としての理論や意見も堂々と述べられるべきであろう。そういった意味で、移転問題は跡地問題として早い内からスタートすべきであろう。

今回はこの程度で問題提起を終えるが、事態の進行によっては改めて移転問題への言及にチャレンジするかもしれない。

#### ひろしまのまちづくりの動き

#### ① アーバンスポーツの世界大会「F I S E」開幕！

若者に人気の都市型スポーツの世界大会「F I S E」（フィセ）が国内で初めて広島の旧市民球場跡地で4月6日から3日間開催。

初日が雨で中止となったため、目標の10万人には届かなかったが、5日の前夜祭を含めて延べ約8万6千人の来場者。

F I S Eはフランスのイベント運営会社が1997年に始め、2014年から世界各地を転戦。広島大会は東京五輪組織委員会を中心とした日本アーバンスポーツ支援協議会（東京）が主催し、平和を尊ぶ五輪の精神と被爆地のメッセージ性が合致するとしてこの地が選ばれた。今後5年間広島での開催を希望している。

2020年東京五輪種目に新たに採用される自転車BMXパーク、ボルダリング、スケートボードの他、7競技の世界トップ選手による華麗な演技を身近に観戦できることは、若者スポーツの普及・定着に期待が持てる。

昨年11月の開催地決定から周知期間が短く、また初めての大会という不安要素もあったが、まずは成功裏に終わったと言えよう。市民も物珍しさに惹かれて足を運んだ人が多いと思うが、見世物的な要素もあり、随所で観客からの歓声が上がっていた。

県・市は経済性や市民の満足度などの波及効果を検証し、来年以降の対応を検討する予定。

#### (コメント)

この地の持つ地霊が今回のF I S Eを呼び込んだ。多くの他の分野をも引き寄せる可能性を秘めているので、フレキシブルに対応できる空間がこの地に求められているのではないか。

#### ② 紙屋町・八丁堀地区再生への取組！

広島市中心部の紙屋町・八丁堀地区の「都市再生緊急整備地域」の国指定を目指し、広島市は3月27日に国、県、広島商工会議所等で構成される検討協議会を発足。近日中に2回目が開催され、エリア設定と整備方針の素案策定に取り掛かる予定である。

都市再生緊急整備地域は、緊急かつ重点的に市街地整備を進める地域として国が指定し、指定されると土地利用の規制緩和や税制支援などが受けられ、民間活力を中心とした都市再生を促すことができる。JR広島駅周辺地区は2003年に指定済み。

市は広島駅周辺とこの地区を核とする「楕円形の都心づくり」を目指しており、同地区を中四国地方最大の業務・商業ゾーンと位置付けている。

同地区は建て替えや再開発などの計画が相次ぐなか、地域住民が主体的に関わっていくエリアマネジメント手法の導入を検討している。

#### (コメント)

広島駅北口周辺で「エキキタまちづくり会議」が発足し、エリアマネジメントをスタートさせているが、まだ行政頼りで軌道に乗っているとは言えない。サポートする環境作りと人材を育てるシステム作りに本格的に取り組んでいく必要がある。



## ○ 広島復興の軌跡・人物編 (第10回) ～竹重貞蔵県都市計画課長～Part 1

～県職員として当初の広島市の復興計画に関わり、そこで基本方針が確定された～

その筋の関係者でなければ、ほとんど知られていない復興計画の大立役者竹重貞蔵氏。土木系の技術者であるが、広島市の公園計画において、将来を見通した展望をもって辣腕を振ったプランナー(以下敬称略とする)。

### はじめに

またまた個人的なことから始めて恐縮であるが、竹重貞蔵との出会いは、昭和53年のことで、まさに広島市の復興計画史研究に着手した時であった。当時、オーラルヒストリーという手法で、最初にインタビューした復興計画の計画策定者であったが、このやりかたで果たしてどの程度実態に迫れるか不明のままの出発であった。ところが、意外や意外、芋づる式に多くの関係者が浮かんで来て、この人たちを対象としてインタビューしていく内にいつの間にか50人を越え、100人を越え、壮大な復興計画史の音声収録庫(書庫、倉庫)が出来上がった。これは将来、どなたかが参照しようとするれば、多くの情報源として役立つであろうと思われる。というわけで、その最初の1頁になったのが、竹重貞蔵であり、記念すべきスタートだったことになる。



竹重は昭和18年6月広島県土木部都市計画課長として福岡県から赴任し、昭和22年5月(4月説あり)に愛知県に転任している。昭和20年12月からは西部復興事務所長も兼務している。

### 8月6日のこと

竹重からいろいろなことを聞き出したが、まず最も鮮明で、極めて印象的なことは被爆時の行動であった。というのは、たまたま広島被爆前日の8月5日、通勤に使用していた自転車がパンクして、そのまま職場に置いたままで、6日は徒歩によらざるを得ず、いつもより出勤に時間がかかり、観音附近(西観音小学校)で原爆の炸裂に遭遇したという。当時、広島県土木部都市計画課は本川国民学校に間借りしており、もし時間通りにもっと早く出勤していれば、まさに爆心地直近と言える場所に到達していたかも知れないのであった。

そこで竹重は、火傷を負って、暫く休暇を取るのであるが、とにかく一命を取り留め、やがて癒えたという。直ぐさま国から復興計画に関連して多くの指示があり、それに対応することが迫られた。

国としては、同年11月15日に戦災復興院を設立しており、全国の100を越える戦災都市に対して、戦災地復興計画基本方針を定め、それに基づいた指示が次々に発せられた。広島県としては、広島市、呉市、福山市が戦災都市であった。

### 疎開政策・作業のこと

被爆と復興を語る前にどうしても触れておかなければならないことがある。それは戦時末期に強行された建物疎開である。竹重によると「19年(昭和)から始めてますかね。ところが私も非常に印象深いのですが、昭和20年の5月の5、6日頃だったか、上旬だったのですが、当時の大塚知事から知事室に呼ばれましてね、広島でね、大々的な建物疎開をやれというんですね。(中略)大塚知事は『今常識で考える時じゃない。バカらしい考えを起こしてやれ』と、こういうお話しだったですね」と言われたと回想している。こうして昭和20年4月半ばから5月、6月、7月と予想を超えるようなスピードで建物疎開が強行され、多くの義勇兵、学徒が動員され、8月段階ではほぼ最終形に近づいていたといえる。そして被爆……。

### 特に百メートル道路のこと

竹重の構想した復興計画の全体像については、回を改めたいが、極めて特徴的な計画は百メートル道路計画であろう。これは広島の独創的計画というわけではないが、結果的に名古屋と広島という戦災復興計画の最も象徴的に実現した都市に姿を留めている。ところが、この百メートル道路の計画場所が、戦時末期に実施した建物疎開場所とかなり重なるということが、地図上の作業をすれば明らかとなるのであるが、そのことを竹重に尋ねたところ意外にも否定され、そもそも建物疎開をした場所も、百メートル道を計画した場所も、被爆で焼失して区別がつかないのであるから、建物疎開場所を道



路計画として意識したわけではない、というのであった。果たして真相はどうか、竹重は百メートル道路計画の独創性を協調しようとして、建物疎開場所に引きずられたわけではないと言いたかったのか、あるいは純粋に新たな百メートル道路計画として線引きしたとき、必然的にこの場所に落ち着いたということだろうか。

## エピソード

まだまだ続きがあるが、ここで取りあえずこの回を終了するために、特別のエピソードを紹介しておきたい。実は、広島復興計画において建築家として有名な丹下健三が戦災復興院嘱託として関与しているのであるが、昭和21、22年当時、竹重と丹下とやり取りした体験があり、インタビューの時にそのことを思い出してつぶやいた。その最も印象的な内容は、丹下健三に対する思い出を語ったのであるが、竹重は「丹下さんがあんなに、あと有名な建築家になるとは思ってみななかったよ。あの時、少しきついことを言ったかも知れない」と言ったのである。

「言ったかも知れない」というのは「言った」ということに他ならず、「きついこと」というのは多分に「失礼なこと」ということに他ならない。戦後直後のあの頃、県の都市計画課長と大学の助教授、それが東大助教授といえども、その権限や地位の大小、上下は明らかに県課長の方が大で、竹重にしてみれば「この丹下が何だ。大した都市計画の知識もない癖に、偉そうなことを言って」と馬鹿にしたに違いない。確かに丹下は都市計画分野の助教授ではない。それがあれよ、あれよという内に有名な建築家に、しかも世界的にも有名になってしまった。それは如何に竹重自身が自慢しても、圧倒的な世評レベルでの格差になってしまったのである。

すなわち、あるとき誰かが若くて力がないと言って、その人を馬鹿にしたり、きつく当たったりしてはならないということである。その人が将来、予想を超えるくらいの大人物、有名人になるかも知れないということ、心して付き合っておくべきなのである。

## □ ほっとコーナー 『江田島にコワーキングスペースができました』

フウドボランティアスタッフ 蔭田千登勢

昨年10月、江田島に初のコワーキングスペース「フウド」ができました。江田島市地域おこし協力隊の後藤峻さんが立ち上げました。私はそこでボランティアスタッフをしています。

コワーキングとは、全く違う会社の人やフリーランスの人たちが同じスペースを共有して仕事をする事です。コワーキングスペースを使うことで、利用者間にコミュニティができ、そこから面白いモノ、コトが生まれることがあります。

私は昨年8月に会社を辞め、千葉県金谷という場所にあるコワーキングスペース「まるも」に1ヶ月間滞在していました。

まるもは別名、「フリーランスの聖地」と呼ばれており、組織に属さず、主にパソコンを使って生計を立てている人たちが周辺のシェアハウスに住み、生活をしています。

まるもがあることで、金谷には40人近い若者の移住者、滞在者のコミュニティが生まれています。江田島より何も無い場所に。

その場所には、1ヶ月で100万円以上稼ぐ豪傑もいれば、野菜を作りながら田舎暮らしを楽しんでいる人もいます。パラレルワーカーを目指す人、旅を中心に生活する自由人、組織で働くことができないからフリーランスを目指す人。本当に多種多様な人たちの集まりでした。

私はそこでたくさんの人に出会い、「いろんな生き方がある」ことを肌身で感じる体験をしました。

江田島にも後藤さんを始め、面白いコトをしている人がたくさんいます。ここもまた多様な生き方を教えてくれる場所。

フウドはまだ始まったばかりです。後藤さんを主軸に動き始めたフウドは、これからどんなカタチになってゆくのだろう。いろんな人を受け入れられる場所になったらいいなと思っています。



フウド外観



内部

## ○ 「時代を語り建築を語る会 (第20回)」 報告

### 語り人：平尾順平氏 (ひろしまジン大学学長)

～広島におけるNPO・NGO活動の現状と課題～

NPO法人のひろしまジン大学を率いながらマスコミでも活躍する若手のホープがNPO活動を通じた広島への熱い思いを語る。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2018年3月30日 (金) 18:30～20:30

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ



略歴：1976年広島県生まれ、広島市立大学国際学部卒業、(財)日本国際協力センター入団、JICA (国際協力機構) 出向、帰広して広島平和文化センター勤務、退職後2010年5月、ひろしまジン大学立上げ現職。

### ☆ NPOとは

・NPOは非営利団体で収益を上げて良いが、利益が出ても分配せず、活動に還元。NGOは非政府組織でどちらも民間団体。一般的にまちづくりや福祉・子育てなど国内の課題に対するのがNPO、環境や貧困や開発など国際的な課題に取り組むのがNGOと見られている。

・社会的な信用と責任を持たせるためにNPOを法人化。現在、全国に約5万件、広島県に約900件、最近は法人設立の伸び率が鈍化。

### ☆ NPO法人の作り方と課題

・NPO法人は最低理事3人、幹事1人、社員10人が必要。定款や設立趣意書等の申請書を県や市の担当窓口へ提出し、1か月程度の間市民に縦覧後、認証を受ける。その後、法務局に登録して法人格を取得する。

・課題は人材不足と資金不足。週末に活動している程度で、生業として成立していないケースが多い。NPOを維持・永続させ、雇用を生むためには理念だけでなく、資金不足の前に経営感覚を持つ必要あり。

### ☆ ひろしまジン大学とは

・8年前に市民大学として、生涯学習とまちづくりを主な活動目的とするNPOを設立。校舎やキャンパスを持たず、広島県全体をキャンパスと見立て、学びをキーワードに新しいつながりや視点を模索している。

・先生は広島で活動している人なら年齢を問わず誰でも可。学生もまちの人たち。参加者は、まちに関心のある人、年配の方で若い人とつながりたい人、家庭と職場以外の第3の場所でコミュニティを持ちたい人など。

・ジン大学のスタッフは企画・立案し、裏方としてサポートする立場。現在200人位登録しているが、学生からスタッフに移行する人が多い。

・授業は月3～5回、まち歩きや工場見学、座談会、ワークショップなど。原則、先生への謝金はなく、参加費も実費をいただく程度。スタッフもボランティア。将来的にはもう少し金を回せるようにしたい。

・具体的な収益事業としては、北広島町でのコメ作り (受講料)、東広島市の地域産品開発 (市観光協会から受託)、マーケット主催 (テナント料)、草津の古民家を改修してゲストハウス運営 (今改修中、将来収益)、行政の計画づくり支援 (受託)、マンション建設に伴う地元住民とのコミュニティづくり支援 (ディベロッパーから受託) など。

・ジン大学の目指すところは、行政に頼るのではなく、市民が地域に対して主体的に取り組めるような場を作ること。学びを通して20～40歳代の人が町内会に入ったり、市民活動を立ち上げたりする人が増えてくれればよい。長期的には政策提言までもっていければおもしろいと思っている。

### ☆ 海外での印象深い体験

・学生時代の一人旅でシリアのパルミラ遺跡に行ったとき、帰りのバスがなく節約のため初めて深夜にヒッチハイク。車に乗ると身ぐるみはがれるのでは？と戦々恐々としていたが、無事到着。謝金を払おうとしたが、「お前はこの国のゲストなのだから金を払うより旅を楽しむように！」と諭され、感涙した。

・海外で広島のことを聞かれ、被爆のことだけではなく復興した今の広島を伝えたいという思いが強くなり、広島に帰ることを決意。このNPOを立ち上げるきっかけとなる。

## ☆ 災害ボランティアについて

- ・安佐北・南区の大規模土砂災害の時、復旧のボランティアが殺到したが、受け入れ態勢が整うまでは県外や個人の参加を断るといった事態もあった。マニュアルが無かったこともあるが、連絡・調整などは行政とNPOなどがもっと密に協力することも可能ではないか。
- ・災害ボランティアに参加すると、刻々と状況が変化し、柔軟に対応していかなければいけないことが実感できる。現地の手助けもさることながら、自分のまちに起きた場合にどう対応すればよいか、貴重な学びの場でもある。

## ☆ 質疑応答

- ・どんなまちになって欲しいか？→自由に議論できるまち。平和都市とは何か、平和活動家のための平和ではなく、市民が日常生活の中で平和を体現できるまちでありたい。反核だけでなく、中東や北朝鮮の問題など広義な平和についても安心・安全に語り合えるまち。

国際的な問題を含めて世界の仲介的な会議を広島で行うのは、MICE（マイス：ビジネス・トラベルの一つの形態。インバウンド振興策として各自自治体が誘致活動を行う）の観点からも良いのではないかと。中立的立場で、両方の意見が言えるまちとして認知されたら、世界における広島の独自性が発揮できると思う。

- ・会場より→広島には平和しかない悲観する人もいるが、平和があることは素晴らしいことであり、平和のとらえ方をもっと膨らまして豊かにしてほしい。
  - ・若者のネット依存に対してどう思う？→ネットの世界にのめり込むと自分の心地よい良い情報に囲まれ、偏った人間になる恐れがあるので、リアルなまちに連れ戻す場づくりをしていかなければいけない。若いスタッフに関心のあることは何か問いかけている。
  - ・議論できるまちの条件として人・ステージ・コミュニケーションが必要と思うが？→人と場所はクリアできるが、コミュニケーションが難しい。議論を促進するためには、話し手より会議を回せる人（ファシリテーター）を増やすことが大事。
  - ・議論から実行へ移すには？→ジン大学のスタッフから新たにNPOや企業を立ち上げた人が巣立っていき、その時みんながサポートした。自分たちが走るのも大事だが、若い人たちの活動の芽を育てる世代になったと思う。広島県は起業の支援に力を入れているが、社会活動のインキュベーション（ふ化）のシステム作りも必要ではないか。
- まちにファシリテーションとインキュベーションの機能が備わるとよい。

### \*コメント\*

広島にはまだNPOを育てる土壌ができていないらしい。みんなで盛り上げていく環境を創っていかねばならないと思う。  
(編集委員 瀧口信二)

## ○ 広島市中央公園を考える④ 広島市の庁内検討会議による報告（平成25年）

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、平成23年に設置された「旧広島市民球場跡地委員会」（以下、跡地委員会）の検討結果「旧市民球場跡地の活用方策」が平成25年3月に報告され、その中に添付されている市の庁内検討会議で取りまとめられた参考資料について紹介する。

### 中央公園活用の方向性と空間づくりのイメージ

この参考資料は、跡地委員会での議論の前提として整理されたものである。

#### < I > 中央公園の活用にあたっての方向性

##### (1) 基本理念

中央公園の持つ様々な特性を生かしつつ、シンボリックな空間となるよう「にぎわいの空間」、「くつろぎの空間」及び「文化を醸し出す空間」の3つの空間特性を備えたものとする。

**にぎわいの空間**：若者を中心とする多くの市民や平和記念公園を訪れる観光客を引き付ける、魅力あるにぎわいの空間とする。

**くつろぎの空間**：広島の特性である「水」と「緑」を生かしながら、都心部における花と緑にあふれたくつろぎの空間とする。

**文化を醸し出す空間**：国際平和文化都市の顔として、広島の歴史を踏まえつつ、質の高い文化・芸術・スポーツを満喫することができる、また発信する空間とする。

## (2) 空間づくりにあたって考慮すべきポイント

- ・公園の魅力向上させる観点から、各種公共施設の適正再配置等を検討。
- ・楽しく歩けるように歩行者・自転車ネットワーク等を構築し、回遊性を高める環境整備。
- ・公園へのアクセス性の向上や都心部の観光資源等とのネットワーク化。
- ・広域避難場所としての機能の向上と子どもをはじめ誰もが安心して利用できる環境整備。

### <II> 中央公園及び周辺地域を含めた空間づくりのイメージ

#### (1) 施設の再配置等

3つの空間特性に配慮しつつ、望ましいゾーニングの設定に向けた取組を提示。

**芝生広場ゾーン**：都心に残る貴重な緑を生かし、家族連れを中心に安心して憩うことができるゾーン

**子どもゾーン**：未来を担う子ども世代に、遊びを通じて生きていくために必要な力を身につけてもらうことができるゾーン

**水辺ゾーン**：「水の都ひろしま」の新しいシンボル空間を創出するゾーン

**歴史ゾーン**：広島城の築城から始まった広島の歴史を肌で感じてもらうことができるよう歴史的な雰囲気醸し出す中心的なゾーン

**スポーツゾーン**：多様化するスポーツ需要に対応したスポーツ交流のゾーン

**芸術ゾーン**：芸術の香りが感じられ、芸術観賞や憩いの場となるゾーン

**旧市民球場跡地ゾーン**：若者を中心とした賑わいのための場として、主に緑地広場機能と文化芸術機能を備えたゾーン

#### (2) 回遊性の向上

<中央公園へのアクセス性の向上>

- ・平和記念公園からのアクセス
- ・地下街シャレオからのアクセス
- ・旧球場跡地東側商業施設等からのアクセス
- ・横川方面や寺町方面からのアクセス
- ・アストラムライン、JR白島駅からのアクセス

<中央公園内の回遊性の向上>

- ・幹線道路等の立体横断による連続性の確保
- ・魅力的な園路の整備
- ・案内・誘導サインの充実

#### <コメント>

跡地委員会は、球場跡地を前述の中央公園活用の基本理念とする3つの空間特性を兼ね備えた最もシンボリックな場所として位置づけ、導入することが望ましい機能を「文化芸術機能」と「緑地広場機能」を中心とする機能及びこれらを補完する機能としている。

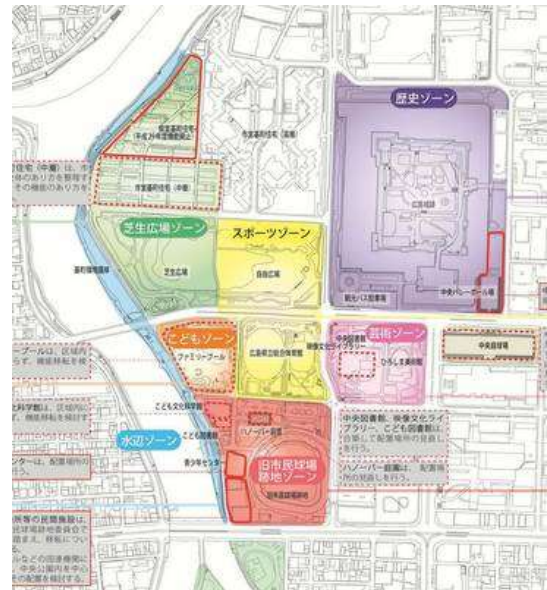
候補として残された「スポーツ複合型機能」（サッカースタジアムを含む）については、別途検討がなされるサッカースタジアム検討協議会の結果を待って判断すると結論を先送りし、後に問題をこじらせる要因を残す。

中央公園活用の基本理念は良いと思うが、施設の再配置等のゾーニングは現状を追認するだけで、説得力に欠けている。現状から目標とする被爆100年の2045年に向けて、基本理念とする「にぎわいの空間」、「くつろぎの空間」及び「文化を醸し出す空間」をいかに実現していくかを明確にしていかなければならない。

(編集者 瀧口信二)

(参考資料)

「旧市民球場跡地の活用方策」：<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1394687136096/index.html>



ゾーニング



回遊性の向上



## デルタの風景 “台屋（だいおく）の鼻”

一般社団法人 空の下おもてなし工房 代表理事 山崎 学  
広島では川が分岐する部分の陸の先端を鼻（はな）と呼ぶ。形態からきている名前に違いない。例えば岩鼻のように突き出している尾根の先端部分も鼻と呼んでいる。これらの鼻のほとんどには名前がついていたらしい。川が分岐する部分の鼻の名前を紹介すると、本川と元安川に分かれの部分は「慈仙寺の鼻」。被爆後、江波に移った慈仙寺が平和公園の先端近くにあったためである。本川と天満川に分かれは「北ノ鼻」。“キタンハナ”と発音するらしい。本川と京橋川に分かれは「一本木の鼻」。江戸時代、白島の京橋川沿いに大きなサイカチの木が植わっており、この辺りの町を一本木と呼んだ。1785年頃の浅野氏時代の治水概略図には、ここで「一本木鼻の水制」と呼ばれる工事が行われたように描かれている。

さて、京橋川と猿猴川に分かれの部分だが、台屋（だいおく）の鼻と呼ばれている。この辺りを台屋町と呼んでいたためだが、別名「出鼻（でび）」と言う。この名前がいつ頃から言われるようになったのかは定かではないが、今の状況を見ると、なるほど、出ているものな、と納得する。石積みの護岸が先ず在るが、そこから石張の鼻が伸びている。さらにそこから、ステージのような三角錐の形をした構造物が伸びている。おそらく流量調整の意味があると思われる。ステージには小さな雁木も付いており、ここに着岸して石張の鼻の真ん中に作られた階段を使えば、鼻の上の公園まで上がることができる。いずれにしても、こんなにユニークで大掛かりな鼻は広島デルタの中でもここだけだ。潮の干満につれて姿が変わるのも美しく、この鼻を取り囲む上柳橋、駅西高架橋、栄橋の3橋が観客席に見える独特の空間になっている。

鼻に固有名詞がついていることは、それだけこの部分が人々の暮らしと関わりが深かったということだろう。特に船からの視点や、水害に対する備えなどが今よりも深く生活に関わっていたと思われる。

この文脈からもう一つ、台屋の鼻で紹介しておくべきことがある。台屋の鼻の上にある公園から駅西高架橋の部分の信号を渡った川土手に小さな神社がある。秀玉（ひでたま）稲荷神社だ。由緒書きによると、毛利元就の時代に、この鼻の治水築堤工事と段原比治山新開地に農業用水を引くための堰をつくる工事がおこなわれた。この工事の犠牲者の魂を祭ったことが神社建立の由来とのことだ。いかにもデルタの街に相応しい由来の神社だ。



秀玉稲荷神社

### 〇お知らせ：響け！平和の鐘実行委員会がホームページを開設！

響け！平和の鐘実行委員会は、この度「響け！平和の鐘」のホームページを開設。昭和24年8月6日の第3回広島平和祭（現在の平和記念式典）で鳴らされて以来、鳴らざるの鐘だった2代目平和の鐘は、平成27年8月6日に66年ぶりによみがえり、今年も鳴らされる。由緒ある2代目平和の鐘が詳しく紹介されているので、是非一読を！

「響け！平和の鐘」のホームページ：<http://hiroshima-peacebell.org/index.html>

## □ 編集後記

スウェーデン・ハルムスタードで開催された卓球・世界選手権団体戦で、韓国と北朝鮮の合同チームが結成され、女子準決勝で日本と対戦した。選手エントリーは、1カ国最大5人だけれどコリアベンチには9人全員が入って熱い声援を送っていた。ここ最近の朝鮮半島は、融和ムードに急展開しており、心底に不安を持ちながらも、期待も膨らむ日々が続いている。

ところで最近、少しずつ耳にするようになった「**プレイスメイキング**」をご存じでしょうか。直訳すると「場所作り」。しかしこの言葉が意味するのは、ただのハードとしての「場」ではなく、空間の居心地が良くなり、楽しいコンテンツが生まれ育ち、賑わいが生まれ、魅力が増し、そして街の価値が上がっていくことを意味している。そして、このプレイスメイキングを推進していこうと日本一の大地主である国が、商業などの様々な要素を含んだ場と賑わいづくりを意識してきているとなると嬉しくなってしまうのは、私だけでしょうか。

さあ！ひろしまも知恵を出していこうではないか。

(編集委員 前岡智之)

### ○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第21回)」開催

- ・語り人：多賀俊介氏（広島平和記念公園被爆遺構の保存を促進する会世話人代表）
- ・テーマ：原爆資料館に一言 ― 改修工事の進展と今後の課題（仮題）―
- ・開催日：2018年6月29日（金）18：30～20：30
- ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C（北棟5階）  
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所  
電話/FAX：082-223-7226 メール：[nisimar5@hotmail.com](mailto:nisimar5@hotmail.com)
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

**\*メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて  
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度以内でお願いします)

#### 編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表